

佐藤先生へ

拝啓

新学年がスタートして、はや一ヶ月が経とうと
しています。

一年十ヶ月に及ぶ支援を卒業して、今、ゆくり
と苦しい日々を振り返っておりませう。まだまた
懐かしい思い出とはいきませんか。高校生活を頼もしく
過ごしているようです。

あれは忘れもしません。息子が中学一年生の三学
期始まってすぐ一週間の行き渋りののち、教室に
入れなくなりました。二日程休んだ後、何とか車に
乗せて学校まで一時間弱の距離を走らせました。
その車中、息子が

「別室ならおれそうや。」

と言いました。

先生に急遽、部屋を用意していたたき、それから別室登校の日々が始まり、中学受験をして中高一貫校の男子校に入学しました。部活の同級生四人からいじめにあっていたようです。半年近く一人で耐えていたようです。元気がない息子の様子を見るにつけ心配はしていましたが、そこまで追いつめられているとは気づきませんでした。

しかし今思えばそれはきっかけに過ぎなかったんだと思います。振り返ってみますと私の子育ては先回りと過干渉のオンパレードでした。

突然の別室登校に焦りと不安、絶望の日々を送ることになりました。病院や不登校専門

機関 フリースクールや学校のスクールカウンセラー
に相談など様々なところに出向いて、手を尽くしまし
たが、息子は頑なに教室に戻ることを拒否し
ました。四ヶ月が過ぎようとした五月の中ば、ネット
で検索していたところ、ヘアレンツキャンプを見つ
けました。運良く、水野先生とすぐに電話でお話
するこゝとが出来、こゝこしかないとの思いを強くし、主人
の理解も得、支援がスタートしたのは五月の末でした。
佐藤先生が担当になり、その都度、アドボイスを
もらいながら、復学を自指しました。自分が真
逆な対応をしていたことも支援を受けたがりこそ、気
づけたことでした。今でも印象深いのは、支援が始
まって二週間経ったとき、学校で春季スポーツデー
がありました。五ヶ月に及ぶ別室登校で息子は、
対人恐怖症のような症状も出てきていました。

あれだけ人を避け、教室を拒否していた息子が、
「スポーツデーに行く」

と言いました。私は内心、飛び上がる程喜びましたが、
佐藤先生のアドバイスのもと冷静さを装い対応しま
した。結局朝から行きました。皆んなの中へは入
れず、一人テントの中でした。一時間もすると
いたたまれなく帰ってきました。私はそれでも良く
行けたねと思いましたが佐藤先生のアドバイスは、間違っ
たものでした。

学校行事に参加するのは、当たり前前。しかも病気や
ケがでもないのに自分の都合で帰ってくるのはダメです
と。息子の状態だから良く頑張ったですが、結局
は当たり前前のこと。当たり前前に出来なかったという
ことです。

色んな場面で自分の感覚がおかしいんだと気づか

される日々でした。最初の予定では、二学期の始業式の復学を目指していました。しかし、息子の状態や家族との関係からタイミミングを計り、佐藤先生のアドバイスのもと、家族会議をすすめることになりました。一番のポイントには親の思いを伝えることでした。

「学校に行くなら別室ではなく、教室へ行くべきだ」と思う。父親の言葉甚木に息子の返事は意外なものでした。「明日から教室に行く」と泣きながら答えたのです。次の日、息子は皆んなと同じように登校し、宣言したとおり、校門を一人でくぐり教室へ行き、一日最後まで過ごしてきましたのです。あれから二年近く、無遅刻、無欠席で頑張っています。

今の息子があるのも学校の先生方、友人、そして何より佐藤先生はじめ、ペアレンツキャンプの先生方のサポートのおかげだといくら感謝しても

しきねません。特に継続登校のストーリーズに入ってからは息子のみならず、私自身のサポートもしていた。だき本当にありがたかつございました。すぐに配症の芽が、よききり出てしまつて私を戒しめていた。だき話を聞いてもらひ、何度も助けられたことは一生忘れません。

佐藤先生との最後の電話で、心に響いた言葉があります。最後にそれを記して、筆をおきたいと思ひます。

息子は今も人間関係を結ぶのが苦手です。環境変化にも弱いです。自分の思ひを表現するのもし下手です。でもどんな息子も愛してあげてください。とこれからもたくさへの愛をすべき子どもたちを救ってやってください。

敬具

二〇二四年四月二十七日